

# 福島県伊達郡桑折町で活動して ～ホスピタリティ演習 (Hospitality Practice) での学び～

団体名 ● Hospitality Practice / 代表者名 ● 齋藤千恵 (人文学部国際文化学科・教授)

## はじめに

福島県伊達郡桑折町に御協力頂き、人文学部のホスピタリティ演習(Hospitality Practice)を行った。桑折町は、人口1万人ほどの町で、江戸時代には、奥州街道と羽州街道が交わる宿場町として栄えた地域である。21世紀の桑折町は、この街道沿いの景観を生かし、また、伊達政宗の祖先の居城であった西山城址によって町おこしをしようとしていた。2011年の東日本大震災で、大きな被害を受けた後も、こうした歴史を生かした町おこしプロジェクトは続いていた。ところが2021年2月に桑折町を襲った震度6弱の地震が、街道筋の景観が大きく変えてしまった。土蔵を含む古い建物が被害にあったのだった。全壊せずとも、地震で壁などがはがれた土蔵は、古い技術を持った職人でなければ修復できず、結局、所有者が解体することになった。こうした状態の中で、桑折町の人々は、ホスピタリティ演習で訪れた学生たちを受け入れてくださったのであった。



町についての説明を受ける学生たち

## 活動内容

ホスピタリティ演習の授業では、人や集団のネットワークに注目してきた。そのため、桑折を訪れた学生たちは、町の観光資源に注目するとともに、人と人、人と集団、桑折町とほかの地域との繋がりについて調査した。また、ハートレイクで親しまれる半田沼や半田銀山、献上桃を作っている果樹園、地元の食材を使ったレストランなど、観光資源となる多様な場所を訪れた。そうして、学生たちは、交流人口が集う場所としての桑折町を考えていった。

これに加えて、ホスピタリティ演習のシラバス作成時(2021年1月・2月)に既に授業計画に組み込ま

れていた街道筋の修景についてのアイデアを出すために、学生の視点から街道筋を見ていった。

## 成果、結果の考察

街道筋に残る土蔵や古い建造物を活用しての町おこしは、度重なる地震によって、極めて難しくなった。町の人たちが落胆する中、学生たちが調査と分析の結果を示したプレゼンテーションで、町の人々に提示したのは、外部の者の視点からの町のよさであり、桑折町の人々の温かさを生かした町づくりであった。(実際、桑折町を訪れた学生たちが経験したのは、町の人たちの温かいもてなしであった。)学生たちが行ったプレゼンテーションは、町の人々を励ましたようであった。



地元の食材を使った料理でもてなされる学生たち

## 今後の課題、展望

観光学では、関係人口という用語を用いて、人口減少に悩む地域のサバイバルを模索している。この新しい概念は、果たして桑折町の町おこしに有用なのか、町の人たちのホスピタリティや温かさに注目し、今後も、桑折町の町おこしに協力していきたい。



奥州街道沿いの景観視察